九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[002] 九州大学農学部農場年報 : 第2号

https://doi.org/10.15017/13212

出版情報：九州大学農学部農場年報. 2, 1999-03. 九州大学農学部附属農場
バージョン：
権利関係：

VI. 寄稿

農学教育に対する学生の意識

- 九州大学農学部学生に対するアンケート調査の結果について -

（於第１５回農学教育を語る会）

九州大学農学部農場 武藤軍一郎

はじめに

アンケート調査は１９９７年９月下旬に九州大学農学部の３年生を対象に行った。９学科のうち食糧化学工学科を除く８学科で実施した。以下に各学科別に回答数とカッコ内に学生数を示した。農学科３１名（３１）、農芸化学科１５名（４４）、林学科１２名（１９）、水産学科１１名（１９）、農業工学科土木専修２６名（２９）、同農業機械専修０名（１７）、畜産学科１５名（２５）、農政経済学科２９名（２９）、林産学科３６名（３５）、食糧化学工学科０名（４３）。計１７５名で、アンケートの回答率は60.9％であった。

１．３年生全員（291名）の男女別割合は、以下の通りである。女子学生が41.2％と著しく増加している。前回1983年には23.2％であった。なお、回答者の女子学生割合は37.1％である。女子学生割合が最も多い学科は食糧化学工学科で67.4％で、最も少ない学科は農政経済学科で13.8％である。

	男	女
1997	58.8	41.2％
前回	76.8	23.2

２．出身地等、カッコ内は前回の数字

前回は福岡県出身が半分を占めていたが、今回は約４割に落ちているが、九州が８割を越えている。

１）福岡38.7％(50.6％)、長崎11.0％、中国、四国11.0％、鹿児島9.8％、熊本6.9％、大分5.8％、　宮崎4.6％、佐賀4.0％、関西4.0％、関東以北3.5％、沖縄0.6％、九州80.5％(90％)

２）普通高校からの進学が100％を占める。

３）新卒　131名、75.7％（前回64.3％）、一浪　41名、23.5％（28.0％）
　二浪　　2名、1.3％（7.7％）

３　家の職業

イ 農業	24名、	14.0％(9.5％)
ロ 農業ｻﾗﾘｰﾏﾝ	8名、	4.7％(6.0％)
ハ 非農ｻﾗﾘｰﾏﾝ	110名、	64.0％
ニ その他	30名、	17.4％

４　入学前に農学部について知ってた程度

イ かなりよく知ってた	6名、	3.3％
ロ 漠然と知ってた	110名、	60.7％
ハ 全然知らなかった	39名、	21.5％(16.7)
ニ 違っていた	26名、	14.3％(11.3)

5 学科を選んだ理由

イ	学問分野に関心	73名	30.3%(44%)
ロ	農業に従事したい	12	5.0
ハ	農学分野に従事したい	44	18.3 (26)
ニ	センター入試	30	12.4
ホ	就職に有利	12	5.0
ヘ	自然、動物等好き	46	19.1 (19)
ト	その他	24	10.0

九大は学部で入学するので、学科でなく学部と読み変える。選択の基準が多様化している。

6 得意、不得意科目

得意	不得意	
生物	44名	12名
化学	62	21
物理	20	57
地学	3	3
数学	76	46
英語	54	55
国語	35	56
社会	37	41

理科が得意な者が多く、国語、社会は不得意な者が多く、物理は苦手が多い傾向が見られる。

7 大学で最もやりたかった事

農学の専門知識習得	48名	24.5%
一般知識を身に	52	26.5
クラブ、同好会活動	25	12.8
遊びや趣味	23	11.7
のんびりすごしたい	22	11.2
考えていない	18	9.2
その他	8	4.1

複数回答ではあるが、農学の専門知識を習得したいは24.5%に過ぎず、7割は違う。学生は確かに様変わりしているようだ。

8 今、大学生活で最も力を注いでいる事

専門的知識の修得	24名	12.3%
幅広い一般知識の習得	41	21.0
友人との交流	39	20.0
クラブ活動	32	16.4
その他の遊びや趣味	24	12.3
卒業のための単位を取る	26	13.3
その他	9	4.6

専門的知識の習得は、現在の方がさらに低まっているのに注目したい。

9 現在農学をどう思いますか

イ	興味がもてる	106名	59.6%
ロ	余り興味持てない	49	27.5
ハ	全く興味持てない	4	2.2
ニ	転学部を考えてる	11	6.2
ホ	その他	8	4.5

約6割の学生が農学に興味を持っているというのは非常に高い評価である。

10 イメージに対する問い、()内前回 単位：%

	よい	ふつう	わるい
教養の講義	5.7(6)	53.7(52)	40.6(40)
専門の講義	12.4(24)	72.3(70)	15.3(6)
実験、実習	27.6(34)	59.2(60)	13.2(6)
教育研究の設備	6.3(18)	53.7(55)	40.0(27)
教官との交流	10.9(24)	54.6(63)	34.4(13)
学生間の交流	27.1(39)	64.1(56)	8.8(5)
大学の雰囲気	7.6(9)	69.2(61)	23.3(30)

１１ 専門教育のカリキュラムの構成

イ	体系的でよい	38名	22.6％(46％)
ロ	改革すべき	64	38.1 (30)
ハ	よくわからない	64	38.1
ニ	その他	2	1.2

教養教育に対する評価は非常に悪い。専門講義にはそれより良い評価だが、前回より悪くなっている。実験、実習にはさらに良い評価だが、前回より悪くなっている。教育、研究の設備は極めて悪い。教官との交流は良くなく、前回より悪い。大学の雰囲気を良くする課題は緊急と言えよう。

１２ 専門教育の内容をどう思うか

１） 開講の内容、範囲

イ	狭い	7名	4.1％(7)
ロ	広すぎる	25	14.7 (12)
ハ	適当	39	58.2 (57)
ニ	判断出来ない	39	22.9 (24)

適当というのが６割で、低いように思える。

２） 実験、実習の内容、範囲

イ	狭すぎる	12名	7.1％
ロ	広すぎる	12	7.1
ハ	適当	115	67.6
ニ	判断出来ない	31	18.2

適当が７割弱でさらなる努力が必要。

３） 講義と実験の水準

イ	高すぎる	22名	12.9％(7)
ロ	低すぎる	3	1.8 (3)
ハ	適当	101	59.1 (70)
ニ	判断出来ない	45	26.3 (20)

適当が６割で、判断出来ないが多い。

１３ 実習（農、牧、林、水産）について

１） 農場実習 農学4単位、土木1、機械2、畜産4、農政2（以上、必須）

演習林実習 林学、林産

水産実習 水産

１４ これからの農学教育、研究の方向

イ	農業生産に役立つ	74名	43.0％(32)
ロ	基礎額	72	41.9 (46)
ハ	わからない	18	10.5
ニ	その他	8	4.7

健全な回答のように思える。

１５ 卒業後の進路

イ	専門の職場	65名	38.5％(35)
ロ	やりたい職場	54	32.0 (33)
ハ	出身地優先	7	4.1 (8)
ニ	専門と出身地	24	14.2
ホ	大学院	17	10.1 (11)
ヘ	その他	2	1.2

2） 農場実習の必要性

イ	必須として必要	91名	54.5％	(56)
ロ	選択として必要	69	41.3	(31)
ハ	不必要	7	4.2	(13)

専門を生かした職場に行きたい学生は7割弱で、やりたいことをやれる職場が3割強いる。前回とそれほど変わらず、自由さが出ているようである。大学院希望が1割というのは少ない。力を注ぐべきだろう。

１１～１３　専門の講義、実験、実習についての学生の声、そのまま総てあげた。

【農学科】

・実験がチョットで何をやったか分からない・席が足りない・もっと学科の枠組みを取った広い授業選択を　・実習をもっと増して　・実習－農業の実態にふれるにはもっと突っ込んで・選択科目をもっと増して　・実習は農業を学ぶのに必要なので無くさないで　・４年になっても必須がある　・各論が総論より先に組まれている　・教職が取りにくい・「基礎」と「応用」が逆になっている　・学生掛は冷たい、笑顔で　・実習は１日単位で（倍増）　・実習は農業知る上で大切　・講義はチャンと聞けば分かるし、実験は楽しい　・必須と選択にムダが多い　・科目自由に取れるように　・実験は下準備が出来過ぎてる・実験が精密でない、学生も教官も意識が低い　・もっと楽しい授業に、しゃべりに工夫を

【農芸化学科】

・必須と選択は区別しなくてよい　・必須を無くし、もっと自由に　・講義に興味が持てない・農学部なので実習を受けたい　・テストを１週間でやるのはやめて　・実習をやりたい（例、牧場）

【林学科】

・北海道実習全額自己負担止めて　・実験を増して欲しい　・専門と教職の必須が重なって４年で資格取れない　・休閑中の実習止めて　・実習交通費は大学が負担を　・何度も泊まりがけ実習があるが、他学部の講義受けられない

【水産学科】

・講義、実験、ダルイ、ねむい、あつい、寒い、臭い　・水産実験所は素晴らしい所　・ヒコーキで講義聞こえない、ハッキリ話して　・水産学科はきたない　・低年次は広すぎる　・必須が多い　・実験所の弁当ばかり、改善して　・系統だった説明、板書する教官少ない

【農業工学科】

・選択科目をもっと多く　・土木も週１回やりたい（実習）　・実習すごく楽しかった。くさかったのも今はよい臭い、ビール最高　・ほとんど選択の自由がない　・講義と実験は同じ時期にやればよい　・カリキュラムがどうなっているのかの説明がない　・選択科目が少なすぎる・実習はもっと多くてよい、泊まってもよい　・農学部なのに農業が少なすぎる　・講義と実験のつながりが弱い　・必須が多すぎる、５１もある　・実習少なすぎる、農業をやらない農学はない　・もっと分かりやすく、面白く話して　・実習いろいろ勉強になり、よかった　・実習はいろいろなことが身についた　・必須が多すぎる　・実習は低年次でやるべき　・選択をもう少し増して　・実習は選択にして　・自分は農作業の体験あるので、実習は意味なかったけど、選択にしてやりたい人が受けるとよい　・必須が多すぎ、興味があるのを取れない　・農場は遠い・必須多すぎ、講座多いので、選択を多く　・講義と実験、実習かみ合って

ない　・講義が先で、実験を後に、２０～３０年も昔の教科書を使うのは進歩のない証拠

【畜産学科】

・同じような科目が多く、その関連が分からない　・参考文献を教えて　・講義受けてない所を実験しても分からない　・実験室がせまい　・必須と選択の関係分かりにくい、理解するのに１年かかった　・実習は楽しいです　・必須を多くして、もっと専門を初歩からやって　・講座分けの時期が遅い　・実習は、学生の意見を聞いて内容を決めてもらえればよい　・体で学ぶことは大切　・実習は楽しく、ためになった　・実習はとてもよい体験になり、絶対に必要　・ノートに書くのに、ＯＨＰで説明されては出来ない　・実験は必須として必要　・農業生産に役立つことと基礎と両方をやるべき

【農政経済学科】

・文系の農経が理系と同単位はおかしい　・もっと個性ある先生がいてよい　・農経学科内では単位数が足りない　・同科目でも教官により評価がちがう　・農場実習より流通の見学をすべき・もっと早く専門を　・実習の体験はよい、楽しかった　・実習は終わってみれば楽しかった

・実習、専用ジャージ上衣を作ればやる気がする　・現カリキュラムは自由に学べるのでよい　・スクールバスは続けて下さい　・農業生産に役立つことと、基礎の両方を　・１単位不足で留年はヒドイ、六本松日で取れる　・実習は、いやいや始めたが、面白かった　・専門は白紙からの出発なのに、単位が少ない　・実習大変よかった　・実習は唯一のクラス共同行動なのでつながりがつよくなった

【林産学科】

・講義、実験は興味を持つまでが大変、持つとよい　・選択の幅を広げた方がよい　・林学実習は長期間で実際を断片的に体験したい　・実習はいろいろな考えを持つよい機会　・実験の時、専門用語を当然のように使われると困る　・化学系の授業少ない　・学年、前後期で単位数アンバラ、必須多すぎ自由がない　・必須多すぎ、好きなのを取れない　・実習大変よかった、授業で得られないものを得た　・単位取得方法が複雑　・大学に入学してコア授業はいらない　・実験のあとに講義がくる　・演習林で何をどう学んでよいか分からなかった　・３年前期までの成績で講座配属するのか、はっきりして欲しい

１６　教養教育と専門教育の関係、学部全体、学生の声をそのままあげた

・教養は役に立たない１０　・教養を減らす　２　・１～２年で専門に　３　・教養不足もっと　・教養教育は面白い、低年次概論はよくない　・低年次教育で講座の紹介を　・新規参入者への援助を　・英会話を増やす　・六本松～箱崎の移動大変　・六本松～箱崎の移動大変、教官が移動せよ　・専門と結合した教養　・選択範囲を広げて　２　・専門になっても教養聞きたい　・奇抜な教養を　・フランス語、ノマド論面白い　・科目によって取得に難易ある　・基礎科目役に立つか分からない　・教養の内容不明確、学科決定ムリ　・学科配属制廃止を　３　・専門と教養関係ない　２　・第２外国語無くし、第１外国語増やして　・生物、化学方面生きたかった　・低年次教　育は無駄　・教養を分かるように講義せよ　・箱崎日に学科紹介は役立つ、毎回変わるのは良くない　・教養が必要ならその理由を明示せよ　・無駄な教養多く、２年間を無駄にした　・希望学科に生きたかった　・物理の必須はつらかった　・専門、学科配属をもっと早く　・必須が多く、聞きたいのを取れない　・教養はコア多くし、体系的に　・教養は重要、専

門に片寄るな　・総て専門にし、必要におうじ教養を聞く　・専門で他学科を取るのはむつかしい　・物理系が多すぎる　・入学時から学科配属・教養が多すぎる・４年間通して授業のバランスを 教養受けているうちに知識が消え、意欲が減る教養は単位取るだけ、無意味　・教養は専門に関係するものだけに　・高年次教育をもっと多く

１７ 今後、開講してもらいたいもの

・趣味の園芸　・第一線の人の話・情報処理・農場実習を他学科にも（農学科）・わたしの花壇　・公務員養成３・外国語、専門を洋書で・昆虫資源利用　・植物の名前　・産業に関係するもの・分子分類学　・倫理　・実際の経営（林学）　・高年次教育の増　・魚の飼い方　・淡水漁労実習　・農場実習のような科目増やす（農業工学）　・マルクス経済学　・基礎体力体育２　・格闘術　・牛馬飼育法　・時局と直結した講義　・農政経済の充実　・農業トピック・ベンチャービ　ジネスと農業経営　・国内外の農業　・国際農産物取引論　・水質保全

１８　日本農業のあるべき姿

・食糧自給達成、死守５　・食糧自給率向上　８　・自給向上と環境、または安定、安全　３・環境保全型農業　１０　・自然にやさしい高生産力・環境保全と国民が楽しむ場　・持続的農業・施設農業　・組み替え食品の研究　・農業のイメージ暗い　・農業重要　・研究開発知識　・経済効率追わない　・世界的レベル流通革命　・多国籍企業による外国での生産と農業保護・　農林水産業と工業の統一　・魅力をアピール、労働力を増やす　・イメージアップ　・食糧危機がある、国は農業に力を　・世界政府を作り食糧、林業を考える　・観葉植物、熱帯魚、ペット　・輸入品に負けないように　・農村の文化、伝統を都市に　・各地域がバランスある作物を　・若者が農村を支える　・農家を大事に、食糧危機がある　・競争原理を　・農業経営、農村社会に関心持つ　・日本で最も重要な部面　・付加価値生産　・衰退は必然、どう遅らせるか　・補助金を止め、完全自由競争　・水源涵養とレクリエーションの場　・補助金なしで自立する農業　・外国との格差是正　・国民に呼びかける　・農業離れを止める　・アジアの手本になる農業を

考察　-九州大学農学部学生の農学教育に対する意識と教官の課題-

1　学生の意識の変化

女子学生が４割を越え、農学科、食糧化学工学科は圧倒的に女子学生が多く、林学科も過半をしめる。このことも学生の意識の変化の一要因と思われる。最近の家族構成の変化、社会の変化による変化が、また、入試の輪切りが多様な思考をする学生を九大に送り込んでいる。したがって、農学部に入学した学生だが、農学に意欲を持って入学した学生は少ない。多様な思考を行う学生に対応する幅広い内容を備えているのかが問われている。或いは、農学に関心を抱く学生を入れるように制度を変えるべきであろう。また、学科選択が成績によっていることから生ずる問題が大きい。

2　教養教育と専門教育の整合性

入学してから物理、数学を必須として課せられ、苦しんでいる学生が存在する。また、生物を高校で取らずに、農学科、林学科、畜産学科、水産学科などに入って、困っている学生が存在する。アンケートに見られるように教養教育不要という声が非常に強い。だが、教養に比べると専門は面白いと変化している。このままでは教養教育が生きて来ない。これは非常に重大な問題で、学生は悩んでいるが、大学は、即ち我々教官はこれを放置してきた。教養科目の体系化（選択を主とする）とカリキュラムの取り方のもっと低年次から専門、学科配属をという要求が強い。しかし、そのようにして教養教育を弱め、丁寧なお手伝いが必要である。次に、各科目の内容を面白く充実したものにする必要がある。だが、それよりも基本的に大事なことは、教養の重要さをキチンと大学全体で捉え直すことである。学生の要求をそのまま飲むわけにはいかないが、このままなにもしないのは大変問題である。

3　講義、実験に対する学生の不満と実習に対する評価

必須が多く、自分が好きな科目を取れない、教職免許が取れないという不満が強い。また、カリキュラムのシステムが分からないという声がある。学科でキチンとやっているのであろうか。講義が面白くない、声が聞こえない、ノートを取れない、昔のノートでやっているなど、誠に恥ずかしい指摘である。各教官は勝手に講義し、それが他の教官と体系的につながるとか、出来る限り講義はだぶらないという配慮がないようである。自己点検、外部評価を受けているが、学生の評価をこそ受けるべきでなかろうか。

実験、実習と講義が関係ない、という指摘に早急に取り組まねばならない。この点では農場も大きな責任がある。今まで農場から学部の講義と関連させて実習を組むという発想はなかった。一方、実習に対する評価はかなり高い。今後、実習、実験をうまく配置し、その中で講義をするシステムを考えるのはどうであろうか。アンケートによれば、現在実習を受けてない学生を含め過半が実習を必須としている。しかし、近く、農場実習は選択化の方向にある。そうなれば、よほど実習の内容を充実した、面白いものにしなければ、学生の農場実習の選択は著しく減ると思われる。

4　学生の声を聞かない教官

九大の場合、学生は黙って講義を受けて居ればそれでよいのだという意識を教官は持っていたのでなかろうか。素直に学生の声を聞こうという気持ちが少なかったと思える。もちろん、学生もよくこちらの事情を話せば理解してくれるはずである。そのような場を作ることが大切でなかろうか。

5　大学院重点化、新キャンパス移転の中でさらに教育の軽視が心配される

今回の改組の中で、文部省に認めて貰うことが先ず優先し、学生のこと、教職員のことは無視されて来た。研究重視が何にもまして大きな声で語られた。研究の重視は当然ことである。その上で、学生のことを考えたカリキュラム、授業の理解、講義法について徹底した研究が急がれるが、それは学部全体として取り組もうと言う意識と余裕が無いように思える。教官の中に、総てに対し諦めて発言しなくなっているのでなかろうか。研究、教育の改革は教官の自主性に依拠し、学生の声を聞いて進められるべきである。

1996年度公開講座「日本農業の現状と未来」の総括

-受講者に対するアンケート調査の結果をもとに-

九州大学農学部農場 武藤軍一郎

当初の目的は、若い人を対象に、農学教育の目的、内容を実習を通して知ってもらうところにおいた。 結果的に受講者は、高校生１４人、大学生１６人、社会人２人で、何れの受講者からも高い評価が寄せられた。男性１２人、女性２０人で、女性の積極性が目立った。参加した動機は、農業に関心があった１２、農学部が何をやっているか知りたかった６、環境問題４、食糧問題２などいずれも我々が期待していた点を指摘している。また面白そうだから１１は以上のことを含んだ期待であろう。

以上のように若い人を対象にした公開講座として成功したことは間違いないが、問題点を把握しておく必要があろう。両コースを受けたかった８、テンポが早すぎた、ゆっくり３、講義を減らし実習を多く２、多くの果樹を見るのでなく、二、三のことをトコトンやる、最後の講義は眠い、夜の交流のまとめ役が必要、夜討論の時間欲しい、農場の野菜食べたかったという問題が投げかけられている。一方、炊事、後片づけに不公平がある、農場の地図分かりにくい、トイレの水が溜まるのがおそいという指摘は技術的に解決可能である。また、農場職員からは、時間がこまぎれで、受講生も講師ともに忙しすぎた、実習に重点を置き特色を出したほうがよい、教官、技官の半数が実習、講義に参加し、後の半数は世話に回ってゆとりを持った方がよい、風呂の事前点検、トイレの有効利用などが指摘されている。確かに２コースに分けたのは多忙すぎ、ゆとりのある公開講座が出来なかった側面があった。高校生の場合、専門性は必ずしも求めていないのでなかろうか。大学生にも農業を理解する体験実習であるという特色を打ち出した方が良いかもしれない。技術的に高度なものは大学に入学後行うということでどうであろうか。

以下に受講者に対するアンケート調査の結果を付記する。

１　参加者

高校生　１４人（男５、女９、１年７、２年６、３年１）

大学生　１５人（男４、女１１、１年０、２年１０、３年２、４年３）

大学院生　１年

社会人　２人（２７才、４５才、男）

２ 公開講座を知ったのは

人から聞いた　１１人　、新聞　９人、　学校の紹介　６人、ガイダンス　２人、チラシ　２人、広報誌　１人

３ 何故参加しようと思ったか

農業に関心があった　１２、面白そうだから　１１、　農学部が何をやっているか知りたかった　６、環境問題に関心があった　４、食糧問題に関心があった　２、その他　１２（進路選択に役立てるため　４、牛に触れたい、自分の研究の参考、農場実習を体験した　い、講義で習ったのを体験したい、農業の幅広い知識を求め、子供の時からバイテクに関心、将来育種をやりたい）

４ 開催の時期

良い　３０、　良くない　１（補講がないとき）
5 期間
適当　２２、　短すぎる　９（高校生５、九大生４）
6 宿泊による公開講座
良い　３１
7 受講してどうでしたか
良かった　２７、　まあ良かった　４（高校生１、大学３、４年、院生）
8 感想文
両コース受けたかった 8、鶏を殺して命、食べること、食物を大事にすること思った 5、テンポが早すぎた、ゆっくり 3、高校. 大学. 社会人と一緒で学ぶもの多かった　3、講義を減らし　実習を多く 2、 農業の体験が出来よかった、　多くの果樹見るのでなく、2、3をトコトンやる、 炊事、後片づけに不公平があ、 農場の地図わかりにくい、 トイレの水が溜まるのが遅い、 食事の量が多い、 最後の講義は疲れていて眠い、 農学部はいろんなこと含んだすごい学問、 インターネット、原爆稲など良かった、 農業へのあこがれから日本農業の現状が分かり、課題を認識した、将来農業に携わる、 交配したイネは成功したかな、 夜の交流のまとめ役必要、 専門用語分からなかった、ジュース・アイスは食べなかったが、田や畜舎で働きかいた汗が素晴らしかった、 夜討論の時間欲しかった、 農学部の全学科にやらせたい、食事おいしかった、 施設野菜がなく残念、 将来は農業の自営をする（九大生２人）

1997年度公開講座「農業と私達の食生活」の総括

九州大学農学部農場 武藤軍一郎

本年は２４名の公募に対し、２２名の参加となった。応募者数は３６人であり、あらかじめ６名を除き、抽選により２７名に受け入れの通知を出した。直前までに５名の辞退申し出があり、２２名の受講者となった。２割は減少するので、今後は２４名を受け入れるとすれば、３０名は最低合格とする必要がある。参加者は女１４名、男８名で、三分の二が女性、高校生が１２名で過半、高校生では男が４割を越えている。短大が２名、高専が１名、大学が５名（すべて九大、女)、大学院１名、予備校生１名であった。

結果的に今回の公開講座は昨年に引き続き成功であった。人数が少なく、落ちついて 実施でたのは、昨年以上によかったいえる。それは受講者の評価からも、また我々の実感からも確信できたと思う。だが、多くの改善すべきき課題が残された。それは今後の改善のために役立つと思うので、小さいこともあげることにする。１）新聞、テレビ、ラジオによる宣伝は今年なみに６月でよいが、パンフレットは５月初めに刷り上げ、５月に県立高校だけでなく、私立高校にも配布する。２年続けたので、九大の公開講座は定着しつつあるので、来年も続けると宣伝は楽になる。今までに参加があった高校、個人にパンフレットを郵送する。テレビKBCとTNCの今年のビデオをダビングして宣伝に使用する。同時に、取材してもらうよう努力する。大学に対しても今年同様力を入れる。九大の他学部の掲示板にパンフレットを貼る。２）班に２人の世話人（教官、技官）をつけ、出来るだけ泊まり込む。今回のように高校生、大学生など若い人は喧嘩することがある。男女の問題もあるので、十分監督する。事故の保険に全員を

加入させる。３）夜の行事を組み、これは全員参加とする。夕方から夜中まで自由というのは良くない。後片づけ、風呂の掃除、朝御飯作り、朝の片づけと小分けしないで全員で全部行う方がよい。班の把握が難しく、仕事が遅くなる。自由にしたので、「原爆稲」の参加者は３～４人に過ぎなかった。４）食事は人により摂取量が異なるので、副食も個人個人が皿に取るようにする。ご飯、汁、おかず、漬け物など大皿、鍋に入れて厨房の前に並べておく。そうすれば残飯は大幅に減る。人手も減る。５） 洗濯が出来ることを前もって受講者に知らせる。等々である。
以下に受講者に対するアンケート調査の結果を付記する。

受講生の評価：良かった２０名（９１％)、まあ良かった２名
講座を知った動機：学校８、新聞６（読売５)、人から聞いた４、テレビ１、その他２で、参加した理由は農業に関心があっった９、面白そうだから８、農学部に関心４、環境に関心４、なんとなく３、学科選択の参考２、その他５
開催の時期：よい１９、よくない１（８／中旬)
開催の期間：よい９、短すぎる１１（４泊５日２例)
宿泊実習：よい２０
食事について：美味しかった１２、量が多すぎた５（食の大切さを言っているのに１)、農場の産物を出したのがよい１、美味しくなか　った１、米がパサついた１
感想：ほとんどの受講生が大変良い経験が出来よかったと評価している。講座全体を対象に評価しているが、肉加工、搾乳、田植えを、特によかったと具体的にあげている。共通して、スモークチキンを作る実習で鶏を殺したの強烈に印象に残ったようであった。命の大切さ、食べ物の大切さ、我々がほかの命を戴いて生かされているという指摘が多かった。